
町民C、勇者様に拉致される【番外編】

つくえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

町民C、勇者様に拉致される【番外編】

【Nコード】

N1979Y

【作者名】

つくえ

【あらすじ】

『町民C、勇者様に拉致される』<http://ncode.syosetu.com/n5611v/>の番外編です。本編を読んでいると分からない部分が多く含まれています。また、時間軸が大きく違うものもあります。今のところだいたいほのぼのですが、R15、更に残酷な表現、シリアス等いきりまじった、カオスな場所になる予定なので苦手な方はご注意ください！ 残酷表現・R15相当の場合は、前書きに記載いたしますので目安になさってください。

断章 1 白と赤 S V 6 9 2 3 年 (前書き)

昔の勇者時代の話
紅蓮^{あか}の勇者時代です。

断章1 白と赤 S v 6 9 2 3 年

青年は寝台の傍らに立ち、嘆息に混せて言葉を零した。

「馬鹿だなあ」

静かな部屋にそれは聴くものがないまま拡散し、世界に混じる。寝台の上で、少女は安らかな表情で眠っていた。まるでやかだつた頬の稜線は薄くなり、僅かに女の色香を漂わせている。咲き初めの花の美しさを宿しかけていた年頃だった。ほっそりとした腕は、握りつぶせそうなほどに細い。遠慮がちに胸の上に組まれた指の下には、一冊の本が抱きしめられている。

もうこの眸が開くことはない。

よく笑う娘だった。あの自己中心的な男に邪険にされながらもよく付いていけると、傍目から見ても感心したものだ。真っ直ぐにあの男を慕っていたが、既に全ては星の彼方、世界の記憶の中しかない光景である。あの男も、彼女もない。

青年は、もう冷たくなりかけている少女の額に掌を当てる。飛び去りし魂の気配は、すでに欠片も残っていない。

「君は本当に馬鹿だ」

少女の唇には、ほのかに笑みが浮かんでいる。

やわらかな日差しの中で午睡をしているように、彼女は永遠の眠りに就いた。

今日、この時に彼女の魂が途絶えると、星から読み取ったのは青年だった。残された時間を知りたがった彼女に、残酷な現実を告げたのも彼だった。少女は真っ直ぐに彼を見上げて一言だけ告げた。嬉しい、まだそれだけ時間がある。

彼女は本当に嬉しそうにそう呟いたのだ。青年はそれ以上声を掛けることは出来なかった。ひとの命の儂さに触れるたびに、その強さにも驚くのだ。

少女は青年に、最後に一つだけお願いをした。

それは遺言かな？

青年の問いに、少女は答えた。遺言だったら、絶対に、お願いを聞いてくれますか？ 静かな凧いだ眸は、若々しい姿に似合わず静謐を湛え、彼を見上げた。

その眸には悲嘆もなく焦燥もなく、ただ全ての運命を受容した穏やかさだけが漂っている。静かな海のように少女は全てを深く深く懐に仕舞いこみ、その上で笑う。

仕方ない。最後に一つだけ、叶えてあげよう。

青年は一瞬その深い色に吸い込まれそうになりながら、苦笑しながら返事をした。

ありがとう！

少女は笑いながら何度も礼を言った。それだけが気がかりだった、と。もうその頃、彼女は床から離れる事はなく、命数を数える日々を過ごしていた。

まだ少女の声が耳に残響を残す。いつかはこの音も青年から消えてしまうかもしれない。星が巡る限り、世界は流動する。それも定めの一つだった。

「おやすみ、やすらかに、

青年は最後に彼女の名前を告げたが、それは既に記憶の彼方にしかない残照であり、世界から失われたものだったため、空気を揺らすこともなかった。手向ける花がない代わりに、これぐらいしか死出の旅立ちに渡すものはない。

青年は少女の手が触れている本を抜き取った。まだ硬直していないそのたおやかな腕は、ゆっくりと胸の上に納まる。

本に少女の魂が乗り移ったかのように、それはほんのりとぬくもりをもっていた。

最後の少女の願いは、この本のことだった。なるほど、その願いは確かに青年しか叶えられないものだ。彼は少女の最後の願いをかなえるために、踵を返した。窓から吹き込んだ風が、ふわりと白

いカーテンを揺らす。

風にまぎれ、おねがいします、とささやきのような少女の声が聞こえたような気がした。が、それは恐らく感傷が呼び起こしたものだろう。もう彼女がいないのを先ほど確かめたのだから。

青年は二度とこの場所に訪れる事はなかった。

青年が去ってしばらくのち、部屋に世話係の女性が現われた。

彼女は少女の様子に気づき、静かだった部屋に悲嘆の音が響き渡る。

残された人々は、少女が最後まで大切そうに書いていた日記がないことを不審に思い、探し回った。しかし、それはついぞ見つけることが叶わなかった。その書物の話は、それから時の彼方に消えていった。

50話記念アンケート第2位『町民Cと勇者様のほのぼの』

「勇者様は、海馬さんって見たことあるんですか？」

それはいつもの休憩時間だった。私はクッキーを頬張りつつ勇者様に問いかける。今日もクッキー美味しいです。あと四枚かあ。大事に食べよう。割れないようにちゃんとしまっておかなくちゃね！私の疑問に、近くで腰を下ろしながらも警戒していた勇者様は振り返って、

「ある」

と言った。

なんですと！ すごいっ！ 私は思わず身を乗り出すよ。

「どんななんですかつ、もふもふ？ それともわさわさ？ まさか、つるつるなんですか？ いろいろ想像しているんですが、イマイチ分からなくてっ！ どんななんですかつ！」

ずるずると座ったまま詰め寄ります。私の勢いに勇者様が逆に引き気味です。失礼な、噛み付きませんよっ。

「びちゃびちゃだと聞きました」

あっさり横からネタばらしするのは神官様だ。私は心にダメージを負いました！ なんですと。びちゃびちゃ！

……っで、つまりどんな？

「びちゃびちゃって、毛がですか？」

それはなんか……可愛くはない生物なのか？ ちょっとショックですね。てつきりもふもふかと。

「常に海際で生活する、半水棲動物ですよ。だいたい水の中か岩場に棲息しています。馬類に分けられていますが、本当のところはどうなんでしょうね」

珍しく適当な返事だ。いつもならびっくり詳細解説なのにな。

「神官様は動物にはあまり興味が無いのですか？」

多分なんでもとことん突き詰めるタイプだと思うよ！ 勝手になんでも深くご存知だと思っていました。

「そっち系統の資料は、あまり神殿にはないんです。興味をそそるところではありませんが」

「あー、もふもふはあまりあそこにいそうにないですね」

もふもふどころか人間以外の生物がいませんよね、あそこ。

星原樹を囲んでいた白いでかい壁が頭を過ぎる。といっても私が知っているのは神殿と王城だけ。せつかく星都にいったのに、おのぼりさん気分を堪能していませんよ！ 今度行ったら是非観光したい。

ともかく、神殿に動物がないのは分かった。先に好奇心をみたすことを優先して、私は勇者様に詰め寄る。

「可愛かったですか？ どんなのなんですか？」

唯一の目撃者は離さないよ！ ふふふ。あの言い方だと、神官様は実際を知らないようだから、勇者様しか情報源がありません。

勇者様が私の迫力に目を逸らしました。なんですか、その見てはいけないものを見たような雰囲気は！ 顔が変わってないけどなんとなく察したよ！ ピンと来た！

私は地面にしゃがみこみ、ガリガリと陸馬さんを描く。もふもふ具合が我ながらよく描けました。誉めれるレベルです。

「これが陸馬さんだとすると、海馬さんはどんな感じなんですか？」
勇者様が少し考えた後、私の横にしゃがみこんで石を手に取った。
その手元をじーっとみる。

「足は四本で、首は一本だった」

地面に描かれた物を見て、私は沈黙した。これが、ゲー術ってやつですか。確かに爆発しそうです、私の頭が。四角に棒が刺さっている状態の何かが出現しました。ヘタとかいうレベルじゃない。伝

えたいことが一切伝わらない、恐るべきものが出現しました。
絵を挟んで沈黙する私と勇者様。

沈黙が、重い。

陸馬さんがもっしやもっしやと餌を食べながら私達をつぶらな瞳で見つめています。私は助けを求めるように陸馬さんを見詰めましたが、速攻で反らされました。ひどい。

これはいろいろつつこむべきなのか。それとも私が頼んだから曖昧に流すべきなのか。選択のときが迫ります！

私は意を決し、口を開きました。

「……足の数は、陸馬さんと同じなんですね……」

大きな流れには呑まれる。それが私の生き方です。逝き方じゃないよ！ 権力に迎合する一般庶民です。ちょっと難しい言葉を使ってみました。

「……すまない」

勇者様がボソツと謝罪の言葉を落とされました。いやああ！ やめてください！ 私が…私がツいたたまれなくなるっつう！

「いえ……よく分かりました」

勇者様の画力が。

神官様は静観する方向にしたようです。でもここで口を出さないのは、神官様も絵が下手疑惑が浮上しますが、よろしいのでしょうか？ 私はじつと神官様を見詰めましたが、にっこり笑ってスルーされました。笑えばいいってもんじゃないよ！ たしかにドキツとするけど！ 勇者様の笑顔仮面具合には別の意味でドキツとするけど。いや、あれはビクツとするのか。

「いつか、」

勇者様が不意に口を開きました。私は神官様とのアイコンタクト

をやめて、絵を見ながら口を開く勇者様へ視線を戻しました。

「海際に行ったら、みることもあるだろう」

おお！ それはナイスアイデアですよ！ それであれば、誰の学力も必要とせず、海馬さんが見ることが出来る。素晴らしいですねっ。

「そうですね！ その時は海の水なめてしよっぱいとかしたいです！」

海かあ、本で読んだことしかないけど、どんなだろう。

想像する私の後ろで、陸馬さんがポーと鳴きました。休憩は終わりのようです。また私は荷物をまとめて陸馬さんによじ登ります。

しばらく陸馬さんに乗りながら海のことを考えて、またさっきの

謎の絵を思い出したのは、私だけの秘密です。

拍手掲載SS 「じぶんについて

「それは昨日も食べてなかったか？」

勇者様の指摘に、私は袋を開ける手を止めた。む、違いますよ。これはこだわりがあるから、ちゃんと主張しておかなくちゃね！

「昨日のはアストロベリーでニガすっぱ甘い味のクッキーです。こっちはチュウトロベリーで、まったりとした味のクッキーです！色がちよつと違うでしょう？」

味はかなりの違いなんだけれども、見た目ではあんまり分からない。間違えて食べた時のダメージは倍なんだけどね！

「ああ、確かに良く見たら組成が違う」

組成つて、素材のことですか？ よくわかんないけど、違うのが分かってくれたらしい。

「一ついかがですか？」

差し出してみるけど、勇者様はあっさりと首を振った。

「気持ちだけ受け取っておく」

私は一口クッキーをかじりながら考える。大体、甘いものを勧めたときには断られるなあ。これってつまり、

「勇者様は辛党ですね！」

と閃いたのだ！ 思いつきり指摘してみるけど、

「そうでもない」

とあっさりと切り捨てられました。ですよー！

「じゃあ食べ物の好みは一体なんですか？」

勇者様は少しだけ考えた様子で、

「水」

と答えました。

それは食べ物なんですか！

いや、食べ物？ むしろ飲み物？ 確かに、水が好きな人もいるけど！ でもここでせつかく返事してくれたのに否定するのもどうだろう！ むしろ、勇者様は水がとっても大好き？ なら、人の好みにケチをつけるのもいけないよね。この場合、どう答えたらいいんだ！

ぐるぐる考えちゃうあまりに固まって唸る私。

「水は鉱物でしょう」

それまでもくもくと太陽の位置から方位を割り出していた神官様が横からつつこみました。

コウブツだけにね！ って、それは冗談ですか神官様！ これも反応に悩むな！ 勇者様と二人、神官様を見て沈黙を保つ。神官様は逆に不思議そうに首をかしげた。あ、ギャグじゃなかったんだね！ そのとき、陸馬さんがポーと鳴いた。あ、餌の時間ですね。

乾燥させた草を陸馬さんの口元に持っていくと、大きな歯でもそもそと食べる。

陸馬さんのつぶらな瞳が、まだまだ足りないと訴えかけます。足元の草をちぎって大丈夫な種類か神官様に聞いてから、陸馬さんの前にドサドサと置く。

ちよつと手が青臭くなつたから拭いて、クッキーの時間の再開です！ 私を見て、勇者様が何か言いたそうにしている。うっ。

ニガすっぱ甘い方を間違えて食べた。

「そっちは苦いやつだと思っ」

御指摘は、お早めに！ ですよ、勇者様！

拍手掲載SS 何かについて(前書き)

いろいろはっちゃけています。

アンケート「神官様の何か」より。

拍手掲載SS 何かについて

着替えの途中、それが気になったんですよ。

お腹をつまんでみる。

ふわっ……。やわらかいね……。

なんか、この、スカートの上にちよつと盛った、お肉的な何かを直視したくないんですが。何かじゃなくて肉……いやいやいや！

み、見なかつたことにするぞ……こんなものはなかつた！ うん、それでいいよね。

今は宿屋でやつと一休みです。わーい久しぶりの人里だ！ 晩御飯やおやつにテンションが上がるよ。

今日は一人部屋になりました。ごちゃ混ぜだと色々気にするそうです。私以外が……。確かに着替えは不便だと思えますしね！ それ以外？ あえて気にしません！ これを主張したら、神官様が黒い笑いを見せていた。なんですかその笑顔。正直怖すぎます。

というわけで、旅の汚れをタライで借りたお湯で拭ってさっぱり落としてから、着替えて終了！ そういえば、この後どうするのかな、話を聞いていなかった。

そんなことを思い出して、きちんとカギかけて、荷物持って、やってきました隣の部屋。

ノックをすると、どうぞとの神官様の声。

私は普通にドアを開けたんだけど。

速攻閉めました。

いや、その、うん。

目に入ったものが半裸の勇者様だった。下半身じゃなくて上半身だったからセーフ！ 色々セーフ！ どう見ても着替えの途中でした。あばばばばば。

いや、そういう状態では入っていいよと言わなくていいですよ！ あれ、でも許可したのは神官様？

遠い目をして、ドアノブを持ちながら硬直する。うん、そうだね、とても素晴らしい腹筋とお腰をお持ちでした。って違う！ 何を私は目に焼き付けているんだああああ！ 痴漢ならぬ痴女じゃない！ ちよじやないよ！ ちよっと目に入っただけです！！！！ うわああああん！

ドアの前で半泣きになると、神官様がドアを開けてにっこり笑いました。

「一緒の部屋だと色々弊害があるのを分かっていただけでしたか」

「こ、これは罠だったのか！ まさかの教育的指導ッ！ 私は恐れおののきました。」

「いろいろと、まあ」

「一緒じゃなくても弊害があるがな！

尊い犠牲になった勇者様なんです、相変わらずの無反応でした。逆に慌てた私が申し訳ないです……いや、見ちゃったから私が悪いのかな？ あれ？

でもあれぐらい腹筋があればなあ。はあ。

じっとお腹を見る。

拍手掲載SS 腹筋について(前書き)

いつもより町民がナナメ上です。

アンケート「町民C、勇者さまに復讐する」より。

……復讐？

微妙に前の話と続いています。

拍手掲載SS 腹筋について

それから私は勇者様の腹筋が気になりだした。さすがにじっと見ているものだから、勇者様といえど、どん引きですよ。無表情で気まずそうにしているのが分かる。まさに無表情を読み取る技能がついてきたのですよ！これが私の成長うつつ！

どうやればあれぐらい腹筋が鍛えられるのか……。

興味は尽きませんしね！

もぐもぐと乾パンを噛みながらじっと眺めて考え込んでいたら、さすがに神官様が、

「最近目線が怖いですよ」

と爽やかに指摘しました。口の中のものをゴックンと飲み込んでから、

「観察しているだけなんです」

と主張する私。

「前、私を荷物かつぎで勇者様が運んだ時、お腹が痛かったんです」

「……あれは、申し訳ないことをした」

勇者様の謝罪は以前いただいたから大丈夫！ 気にしないでください。なので私はフォローした。

「いや、その件はお腹が痛かった事は恨みに思ってるだけで大丈夫です！」

「恨んでる時点で駄目でしょう」

神官様のツツコミにも、私はくじけない。理想のお腹を手に入れるために！

「お腹が痛かった思い出は、多分勇者様には分からないです。あんなに立派な腹筋を持つてるし。どうやって鍛えているんですか？」

私も割れ目を手に入れたいです。あれぐらい硬い感じだったら、担がれても痛くないだろうし！

「ああ、この間ので見たのか」

「はい！」

元気に返事をしたところで、あれ、なんか違う気がしたけどまあいいや。

「特に鍛えていない。昔から野山を駆け回っていたぐらいだ」

まさかの野生児発言です。神官様がニコニコと補足します。ああ、そつえば幼馴染と一緒に居たつて聞きました。

「まあ、生活に直結していませんから。結構あれで体力が付きましたね」

神官様がほのぼのとした感じで思い出を語りだしました。

「足場のない木に登って鳥の巣から卵とつたり、肉食獣に追い掛け回されたり、木の実を求めて山深くに分け入ったり、草食獣と根菜を争って戦ったり」

つて、内容があまりにも想像以上に生存闘争なんです！もしかして、勇者様だけではなくて神官様も華奢にみえるのに同じ行動していたんですか！ あ、それで体力あるのかー納得。

「所詮、日々の積み重ねですよ。これから鍛えてあげましょうか？」

「いいえ間に合ってます！」

速攻断つてしまったら、神官様が残念ですと仰った。……本当に残念ですか？

でも絶対恐ろしい教育方針が待っているに違いないよ！ 谷の底に突き落として、這い上がらせる、そんな気配が漂っている！ ぶんぶんするよ。それにしても腹筋かあ。手に入れられない、遠い存在です。ところで、腹筋つてどれぐらい硬いんだろう？ 今更ながら気になる。前読んだ小説では、金属棒で殴られて、棒が折れ曲がってた！ いや、小説だって分かっているけど、喩えとして……ね？ これはこれで、確かめる必要があるっ。

「とりあえず、勇者様」

「何だ」

「腹筋、触ってもいいですか？」

あっ、どん引きした！ 明らかに心の距離が開きました、今！
神官様が溜息をついて、一言。

「色々やはり教育が必要ですね、教育が」
えー！

終わり???

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1979y/>

町民C、勇者様に拉致される【番外編】

2012年1月2日07時45分発行